

# キブツの子供たち

## ▽授乳と離乳

### ▽「乳児の家」から「幼児の家」へ

M・E スパイロ  
訳・中村悦子  
(第12回)

## 行動の諸相と社会化

### 運動行動

観察の行なわれた時点で、乳児室には一七人の乳児がいた。一二人の男の子と五人の女の子で、年令は四日目から一二月までである。全ての子供たちは、保母の報告からも、アメリカの基準に基礎をおく研究者の観察からも、正常で健康な状態にあった。

アメリカの乳児とキブツの年長の乳児とを比べたとき、運動能力の発達には何ら差異は表われていない。ゲゼルの作った基準に従え

ば、アメリカの乳児は四〇週で一人で座り、這う。一二月目までに立って(支えられて)歩く。乳児の家で観察したとき、一〇カ月半、一カ月、一カ月半の三人の子供が、(支えられて)それぞれに既に立って歩きまわっていた。彼らはひとりて座り、這いまわつていた。四人目の子供は、九カ月目のとき立ち、這い始めた。彼はもちろんひとりて座る。五番目の子供は八カ月のとき這い、九カ月に立とうとする試みをしていた。彼は既に支えなしで座れた。一人の子供は九カ月の頃、頭と胸を上げ始め、十カ月前に這い初めた。この遅滞の事例について保母は、警戒すべき原

因とはみていない。彼の遅れは、その異常に大きい頭のせいであつて、まだ自分で支えきれないほど大きいのだと考えている。一年目の最後の四半分のところに達した三人の子供たちの中で、一人は八カ月で座ろうとし、間もなく成功しそうだ、九カ月になる他の二人は、まだ一人で座つたり、這つたり、立ったりしていなかった。しかし、彼らは頭や胸を上げてぐるぐるまわり、まわりのものに対してはつきりとした気配りと興味を示していた。キブツの母親の中には、集団の生活が赤ん坊の成熟の過程を促進すると主張する人たちがいる。赤ん坊たちはお互いに話し、立ち、

歩くことを刺激し合い、従つてキブツの赤ん坊は都会の子供に比べると、これらの行動において早熟だという。私たちの観察は、これらの主張を裏づけてはいない。私たちの研究の時点で乳児の家にいた子供たちが、キブツの子供を代表する例であるといえるならば、運動の発達に関する上記のまとめは、共同の生活が運動の発達過程を促進するという仮説を保証するようにはみえない。しかし、逆の仮説——大人の励ましの不足が、この種の発達を遅らせるということを証明することもない。赤ん坊たちは保母から特別な要請や刺激を受けることなく、自分のペースで運動技能を発達させることができ、観察の結果、彼らの発達の速度はアメリカの基準に一致する。(保母は運動技能の発達を刺激することはないが、母親たちはそうする、というのが私たちの印象である。)

言語の発達に関して言えば、多くの親は子供たちが「アバ(おとうさん)」と言えらるというが、子供は実際には言葉は使用していない。年長の赤ん坊はそう言えるかもしれないが、彼らはその言葉を自分の父親と関連づけて使用している証拠はない。しかし片ことのおしやべりは正常に表われる。

### 授乳

保母の言うことによれば、全てのキブツの母親は自分の子供の世話をしたがっており(このやり方に対して、遠くない過去に例外はあつたけれども)、そして授乳をするために「出来ることは何でも」する。その上、母親たちは完全な離乳をできるだけ長く先へ延ばそうとする。母親たちは「神話」をもっている、とある保母はいう。それは、母乳は最高の食物で、だからある母親たちは赤ん坊が固いものを食べるようになった後でも、それを与える前に乳を飲ませようとする。更に、母親にとつて授乳は、人間的なよろこびの源泉であり、すでに赤ん坊が母乳からほとんど栄養を得られないとしても、それをやめるのは気が進まない。

今日、授乳の全過程は、離乳や自分で食べることも含めて、ゆつくりとした許容的雰囲気で行なわれる。しかし、これは過去においては当てはまらない。この研究に先立つ約一〇年前までは、赤ん坊は空腹でなくても乳を飲まされておられ、多くの食事に関する問題が、このやり方の結果から起きていた。乳児に授乳を強制するやり方は、全ての赤ん坊は一年

目に約一キロの体重になつていなければならぬとする医者の主張があつたからである。その上、過去において、平等に関するキブツの理想は、成人に対すると同様に乳児にも厳格に適用されたのである。例えば、全ての乳児が同じ体重の増加を示すべきだと考えられたので、全てが同じ量の食物を受けるということも同意された。乳児間の個人差は認められなかつた。この厳格さは離乳に際しても同様に適用される。例えば、コップやスプーンを使って食べることが突然に始まり、乳房や哺乳ビンで飲み続けたいという赤ん坊の気持は許されなかつた。

しかし、一〇年の間に、この厳格さは個人差を強調する方向へとほとんど完全に置き換えられた。平等の理想は、もはや乳児の発達には適用されていとは思えない。子供は食べなければ強制されなかつたし、独断的な最善の体重は決められていないので、離乳の道程はゆるやかなものである。例えば、夕食に穀類が添加されても、それが哺乳ビンで与えられることもある。また、コップを使うと食べようとしない赤ん坊にも、哺乳ビンで野菜が与えられる。ある保母が所見で述べているように、彼らはもはや「赤ん坊について論ぜ

られること」を信じない。そこで、哺乳ビンで与えることは、赤ん坊がそれを望まなくなるまで続けられるのである。

母親は出産から一二時間後にはじめて子供に乳を与えるので、赤ん坊の吸いつきが母乳の流れを刺激する。同じ理由から、赤ん坊はお茶以外は食物を与えられない（それは一日に五、六回、きめられた予定に従って哺乳ビンで与えられる）。赤ん坊を空腹にしておけば、乳を吸いたくなくなると考えられている。赤ん坊は空腹なので、はじめの数日はよく泣くばかりか体重も減っている。

キリヤット・ユディタイムに戻った母親は、六週間の間に六回赤ん坊に授乳をする。この期間、彼女は仕事から完全に離れて休暇を楽しむ。だから予定に従って、深夜の授乳を母親に課すことになるが、それは重荷となるものではない。この深夜の授乳は、授乳の時間を二時から一時へ、二時から三時へと変えながら、六週間のうちに次第に省かれていく。そして、赤ん坊は授乳のために起きずに一晩中眠ることになる。夜、母親の授乳の予定時間よりずっと前に赤ん坊が泣いた場合には、夜番が母親を呼ぶ。しかし以前は、母親は呼ばれずに、夜番が赤ん坊をなだめた。

乳のでない母親は、子供が四カ月になるまで人口栄養を与えるのを許されるべきだということがきめられた。

母乳の出ない赤ん坊のための集団授乳は長いこと廃止されてきたけれど、全ての養育は共同体の枠組の中で行なわれている。乳を飲む赤ん坊は同じ部屋で眠り、そこで母親から乳を与えられる。そして、母親たちは同じ授乳のスケジュールにそっているの、同じ場所、同じ時間に乳を与えることになる。従って、サブラにとって食事は、乳児の頃からお互いに分ち合う体験であり、母の愛のもつ親密ささえも個人的なものではない。母親にとつて授乳は一つの社会的機会であり、そこで子供に乳をやりながら他の母親とうわさ話や会話が取りかわされる。

一般的にいつて、現在、授乳はゆるやかなペースですすめられ、その過程の記録の中には、母親のくつろいだ態度が記されている。次の引用は授乳の状況特徴づける典型的な雰囲気が表示されている。

「五・四五（午前）……一番の部屋では、ここでたった一人の人口栄養乳の母親シユラがヤイル（二カ月）に乳をやっている……

現在行なわれている母親を呼ぶやり方は、一五年前に新しい主任保母により母親の反対を制して制度化された。彼女らはあまり歓迎しない負担であつて、特に冬期にはつらいと不平をもつていた。多くの母親は、今でも夜の授乳に反対している。そして、情報によれば、「これ以上こなくていいですよ」と保母が言う日を、彼らは待っている。

授乳の状況を説明する前に、母乳の出ない母親について述べなくてはならない。今では母親が授乳できないとわかると、ただちに対策がとられる。しかしこれまでは（一五年前まで）赤ん坊は他の乳の出る婦人に養われた。このやり方は、当時キリヤット・ユディタイムを嚴重に支配していた集団主義と平等の始原的な考えと一致したのである。一人の保母は、この実践が、それに関連する全ての人々に緊張を生じていることから、これを「混乱」という言葉で特色づけている。赤ん坊はお腹がすいても、乳母となつて乳をくれる人の子供の授乳が終わるまで待たなければならなかつた。その上、乳母がいつも二人の子供に充分なだけ乳があるとは限らないので、赤ん坊は一人以上の人から度々乳をもらうことになる。このやり方は当の赤ん坊ばかりでなく、

五・四八、ラヘルが入つてきて、マスクとガウンを付け乳をやるためにシユロミート（三カ月）を静かに起こしている……腰をおろし、シユロミートを膝の上に抱き上げ乳房をあてがう……シユラはヤイルをベツトに入れ、やさしく話しかけている……五・五二、ウルダがやってきて胸をぬぐい——ダニーが笑つて、あーあー言っているのをみると彼に近寄り、笑いかけ、ベツトの上でまっすぐに寝せ、何をしたのかと問いかけている（彼はベツトの片方ころがつていた）……それから彼女はネイル（五カ月）を起こし、やさしく抱き上げる……膝の上のせ乳房をふくませた……ラヘルは静かにして窓の方をみている……そしてシユロミートが何をしているかみている……シユロミートは乳房の上に手をおき、あちこち動かす……ラヘルはシユロミートを自分の前におき、彼女に語りかけ、あだ名を呼び、舌をうち、立ち上がり肩にのせた……六・〇二、ウルダはネイルに乳房を与えるが、彼はそれにさわつただけで飲まない！……ウルダは彼にほほえみかけ、ながめ、ゆすり、語りかけ、抱きあげて抱きしめ、おしゃべりをする……ダイナがダイサ（オートミール）をもつてダニーのところへやってきて「おは

他の子供にもつらいことであつた。平等の原則では、全ての子供が同じに体重を増加するようにと考えられていたので、毎回の授乳時には、全ての赤ん坊に同量のミルクを与える。そうすればもう一人の子供にも充分な母乳があるわけだ。母親自身にとつては、母乳を利用することは不幸な成行きであつた。彼女の「欠乏」に対して他の母親たちが中傷するようなことは何も言わないとしても、彼女は彼らに対してひげ目を感じている。その上、子供に乳を与えられないので、乳児の家庭が必要とされず、ただちに労働に戻らねばならなかつた。このような母親は一日の労働の後のみ、自分の子供をみるのが出来たのである。

結局母親たちの抗議が、乳母や共同授乳のやり方を廃止させ、母乳の出ない親の子供は、かわつて保母から人口栄養乳を与えられた。しかし、このことは、母乳の出ない母親たちが自分の赤ん坊と接触できたということではない。この決定的な不公平は、数年前キアツ連合によつて公式に認められ、そのとき、母

よう」と言う……ダニーは笑つて手を振る……母親が彼を着換えさせるとダニーは足をばたばたさせておしゃべりする……シユロミートは着換えて、たのしそうに手をふり、ひとりごとを言っている。母親は何故そんなふうに流しに流しに泣き出して、残りの乳をしぼり出す（シユロミートはベツトにいる）……ラヘルは今にも泣き出しそうなシユロミートを抱きあげる……「どうしたの、いい子、どうしたの」と聞く、そして座つて乳房をふくませる……シユロミートは吸いつく……六・二四、ウルダが戻つてきて、ネイルに笑いかけ語りかけ抱きしめ、ほほにキスをし抱きしめる。」

離乳の過程は、約三カ月に始まり、その頃になると、つぶしたバナナ、あるいはリンゴやオレンジの果汁が、一時半の授乳時に与えられる。母親はこの「固形食」を、スプーンを使つたり、コップから直接に子供に与える。コップで与えるやり方は、ほとんど問題を引き起こしはしない。というのは、それが極めて徐々に行なわれるからである。初めてコップを使つて与えたと、もし赤ん坊がいやがれば、保母は母親にすぐそのやり方をやめる



ようにと注意をする。そして、その後引き続き試みられ、赤ん坊がそのやり方を受け入れるまで、普通、一週間以上の日数をかけて徐々に行われる。赤ん坊がコップやスプーンをいやがり続けるときには、食物は哺乳ビンで与えられる。赤ん坊が固形食を受け入れても拒否しても、いずれの場合も母親は授乳を続ける。そして次第に果汁の量が多くなり、授乳が完全に終るまで続けるわけである。六カ月になると赤ん坊の体重は倍増するが、これが毎日の食事の適否をはかる一つの手がかりとなっている。

離乳は、通常九カ月の終わりまでには完了する。九カ月過ぎても充分な母乳のである母親はまれであり、その上、多くの赤ん坊は、それ以降まで乳を与えられるのを好まず、乳房を出されるとおこってしまう。他の子供は母乳があるいは固形食をたべ、両方を求める者はいない。一般的ななままりは、九カ月の始めまでに母乳の授乳を終えること、そして朝食にはグイサイ（オートミール）を与えることである。

離乳は、八カ月の終わりではまだ完了していないが、それ以前から保母が食事を与え始める。これは普通六カ月のときはじまり、そのだが、ある子供の場合には、一二月月になるまで訓練を受けることがなかった。そしてこの時期には、多くの子供が同時に訓練されるのである。一般的に言って、この事に関する原則は簡単なものである。一定の成熟が要求される訓練の領域では、年少の子供が集団に適応するために、成熟の段階を越えて成長を刺激されることはない。むしろ、年長の子供が、他の年少児が要求される段階に達するまで待たされていることになる。

この訓練のはじまるとき、訓練を受ける用意の整った四、五人の子供は、小型の食卓にすわらされる——その食卓は、これからの数年間使うものと、そっくり似たものである。保母は、子供の前に食物の入った食器をおき、スプーンをもたせる。そして、保母は交互に子供に食事を与える。もし子供が自分で食べようとすると、子供の手が食器から口へいくように手をそえて励ます。しかし自分で食べようとしないときは、あえて励ます試みはしない。この観察の時点では、食卓にすわり始めた五人の子供のうち、誰も自分から食べようとしなかった。もつとも、乳児の家の目標は子供が独りで食べるように訓練することではなく、自分の食器とスプーンをもって

のとき母親は十時の授乳をやめることになる。しかし、もし母親が自分で赤ん坊を養いたいと思えば、その時間に仕事場を離れることが出来れば、そうするだろう。多くの母親は自分の手で子供に食事をやりたいと望んでいるので、母親から保母への交代はゆっくりと行なわれる。しかしながら、赤ん坊が固形食をよく食べないときには、保母は母親が与えることを許可しないだろう。というのは、赤ん坊は母乳を飲みたがるからである——そして大事な点はこの時点で授乳をやめることだからである。

赤ん坊が保母と食事をするように成長したとき、彼らは次のようなやり方で養われる。小さな車付の食卓に食物をのせて寝室の一つ（又はポーチ）に運び、そこで食事が行なわれる。保母は食卓のそばに腰かけ、赤ん坊を膝に抱いて食事をさせる。

食事を与えるときの保母のやり方は様々である。あるときは歌をうたつてやつたり、お話をしたり、さざやいたりする。また、はじめて食卓についてたべるのを学ぶときや食べることに気がないようにみえるときは、赤ん坊が食べたくなるようにと、コップから飲む真似をして（しかし、決してコップには口を

食卓にすわることになれることである。従って、子供が乳児の家へ移ったとき、この食事の取りきめは彼らにとつて全く新しいものではなく、今から本式の訓練が始められるのである。

授乳や食事の状況において、全体的に許容的な性質が流れているために、乳児の家では食事に関する問題は起きていない。しかし、赤ん坊の歯が生える頃細かい問題が起こり、そのときは、充分の注意が払われる。保母の言うところによれば、乳児の家で食事に関する問題が起こるのは、ほとんどの場合、母親が子供に食べることを強制することが原因である。母親が強制的な態度をとるときは、保母が間に入り、もっと許容的な態度をとるよううに助言する。母親が保母の命令を受け入れず、子供が食事を拒み続けるような場合はまれであるが、そのときは、保母は母親の食事の世話を拒否する。

乳児の家の食事の過程にある二つの要素——その定規尊重性と共同的性格——は、子供に否定的結果をもたらす。赤ん坊は同じスケジュールにそつて一せいに食事が与えられるために、ある子供は食べるのを待つて空腹のまま長い時間泣いていることがある。母親が仕

ふれないが）舌つづみをうったりする。けれども保母たちは赤ん坊に食事を与えながらお互いによく話し合っている。いずれにしても食事は早く終わり、一二分から一五分以上もかかることはまずない。赤ん坊はたいい空腹なので早くよく食べる、そして、保母は気長に食べるようなやり方を助長せず、食後に遊ぶこともしない。

保母のこの迅速な食事の与え方は、母親とのゆったりとした食事の様子と対比されるだろう。母親たちは授乳や食事に少なくとも四五分ぐらいの時間を費やしている。離乳を終える最後の日でも、そのときは離乳食を与えるだけだが、それでも食事を長々としている。迅速な食事へのこの突然の変化は、赤ん坊の中で食事の経験の断続を形成する。

赤ん坊たちは九カ月の頃に自分で食べる訓練を始めるが、この時期はちょうど離乳の終わるときでもある。集団教育の他の多くの様相と同様に、この訓練の始まる時期にも中広い年齢差がある。もし保母の一人の子供の訓練に費す充分な時間がもてないときには、グループの他の子供たちがこの訓練に必要な成熟に達するまで待つことになる。従つて九カ月前には誰もこの訓練を受けることはない

事についているときは、赤ん坊が乳を求めて泣いても、それに対して何もなされない。観察によれば、何人かの子供は予定された時間に母親の来るのを待つて三〇分近くも泣き待ち、その間泣いていたし、あるいは泣き寝入りをしていた。ある赤ん坊の場合、母は授乳にくるのにも三〇分近くもおくられてきて、その間子供はお腹をすかせて泣いている。保母は彼をなだめようとすが無駄だった。既に離乳を終わっている子供も空腹で泣くことがあり、彼らもまた規定の食事の間まで泣いたまま待たされていることが度々ある。しかし、子供が食事のすつと前に泣き出して、なだめでも駄目な場合には、保母は台所へ行き食物を早目にもつてきて食べさせられることもある。

全ての子供に規定にそつて食事が与えられるので、時には食事のために子供を起こす必要がある。そのとき、子供は泣き、いらいらしてくる。記録には次のような記述が度々みられる。

「ゴラは授乳のためにウジイ（六カ月）を起こす……彼は泣き続けている……」

授乳において、二番目に考えられる障害の要因は、その共同体的性格の中にある。既に観察した通り、保母も母親も授乳の時間の多くをお互いに話し合いをして過ごしている。時に議論が熱してくると、赤ん坊は乳を飲むのをやめ、また、食事をやる人はそれを忘れてしまうこともある。

「年長の赤ん坊三人が食卓にすわり食べさせてもらっている。母親はウリ（二〇カ月）に食事をさせながら、同時にサラ（保母）のところにも共同台所の仕事について何事か言いに来た同僚に向かって叫んでいる……母親はウリを養いながら、きいたり話したりしている……アブシャロム（二二カ月）が飲むとしないので尻ごみをしたので、サラは彼を椅子から抱きあげひざにのせる……彼がそうして飲むのを嫌がると、彼女は彼のもとにもどした……それでも飲まないのだから彼女はコップをどけた……ウリは食べるのを終えたが母親は依然としてサラや同僚と大声で、熱心に議論している……母親は立ちあがり、ウリを抱きあげ、ポーチの隅へ行き、そこで立ったままサラと議論を続ける、その間ウリはまわりをみている……母親はウリと歩き

ながら、サラと議論を続けている。そのサラはタマル（九カ月）をひざにのせて食べさせている……母親はウリを抱きしめてキスしながらサラの言うことをきき、更に論ずる……母親はほとんど泣き出さんばかりで、その声はふるえている……議論は続き、それに皆が声高に話し出す……みんなが互いに叫びながらいっせいに議論している。」

このポーチの偶には一二人の赤ん坊（記録されていない子供はベットのいる）がおり、三人の保母、二人の母親そして三人のキブツ婦人がいた。熱心に議論をする八人の大人の存在に記録を読む読者も困惑したように、赤ん坊も困惑させられたに違いない。彼らは食べることに興味を示さず、ほとんどの場合その成り行きを眺めて静かに座っていた。このようなことは夕方の食事のときにも典型的に表われる。そこでは——議論は起こらないとしても——母親、父親そして兄弟たちがやってきて大きな混乱が起きるのである。両親がやってくる、もう食事をしようとしないうちの例は多くあり、あるいは列をなして入ってくる人々を眺めて食事に関心をなくしてしまふ。

## 排泄と性的行動

食べることと、独りで食べることの訓練は乳

児の家で受けるただ一つの正式な訓練である。しかし過去において、子供たちが乳児の家に一八カ月迄いたときは、そこで最初の排泄の訓練も受けた。今は一二カ月のときここを離れるので、この種の訓練は幼児の家に入った後で始められる。ここでいう「訓練」は正式なものの意味だが、乳児の家でさえも保母や親たちは排泄物についての自分たちの態度を子供たちに伝えていく。そしてある場合、この伝え合いは非常に効果的であって、子供たちは自分の態度を変えるようになるのである。例えば一人の保母は、赤ん坊が自分の上で通便するのは好まないし、だから彼らはそうしない、ということの説明している。はじめて彼女は赤ん坊たちが両親や他の保母の腕の中で通便しているのを見て困惑した。そこで彼女は赤ん坊を抱いていて、その子が小便や大便をしたようにみえる時はいつでも抱くのをやめることを思いついた。このようにして赤ん坊たちは彼女の上でそそくしないうちを学んだ。というのは、「彼らは私がそれを好まないのを知っているのです。」

様に言葉で伝えられる。

「レアはおむつを汚したアブシャロム（二二カ月）の着せとりかえながら、まあ、まあ」という。」「ウジ（一〇カ月）は身体ばかりかべツドも汚し、おまけに髪の毛にまでくっつけていた……後になって彼を入浴させるとき、サラはこの汚れをみつけ、まあ、まあ」と言っただけでいやな声を出してみせ、着物をぬがせてシャワー室へつれていった。」

このように排泄物に対する否定的な態度は正式な訓練が始まるずっと前から子供たちに伝えられる。しかし一般的にいつ、この態度は許容的である。例えば以前、赤ん坊たちが裸で遊んでいたときは、排泄物をもてあそぶ機会は度々あり、罰を受けずに許されていた。今日では裸でいることはまれであるので、このようなあそびの機会は少なくなっているが、もしそういうことをしたとしても、保母の反応は許容的である。

この許容的な態度はおむつを替えるときにも中をきかせている。保母の日常の仕事は、赤ん坊がおむつをぬらしたり汚したりしたと

き、すぐにそれを取り替えてやる事が出来ない。年少の赤ん坊はぬれたおむつが気持ち悪く、その為におむつを取り替えてもらうまで泣いている。しかし赤ん坊が大きくなるにつれて、以前は心地悪く感じた状況に適應してしまい、もう泣きはしない。

同じような許容的態度は性的な表現にもみられる。この年令での自慰はこの研究の行なわれた時点ではほとんどみられなかった。現在ほとんど自慰はみられないが、かつて赤ん坊たちが長いこと裸のまま過ごしていた時は往々にみられた、とある保母は言う。主任保母は乳児の家に一五年働いてきて、一つの根強い自慰の事例を思い出すのみである。

## 身体的および情緒的健康

一般的にみて、乳幼児は乳児の家で比較的安全定した生活を送っており、子供を世話する人々には、彼らにかなりの身体的および情緒的満足を与えるやり方をしていっていると言っている。身体的健康に関する限り、キブツは最適の条件を用意しており、予防的にも

治療的にもそういえる。

キブツの医者と看護婦の医学的処遇に加えて、月に一回来診する小児科医が全ての子供の健康を管理している。乳児の死亡率は低く、統計表は得ていないが、最近二人の乳児の死亡があっただけである。その二人の死ともまだ病院に入院している間であった。流行病は比較的知られておらず、また病気の事例も他の場所の赤ん坊に比較してキブツに多くはない。緊急の隔離（隔離室、隔離病棟、あるいは病院における）も流行病の少ない一因である。小児麻ひ、チフス、ジフテリア、破傷風の予防注射やワクチンはキブツの看護婦が、赤ん坊の一年目に行なっている。

赤ん坊たちは情緒的にも健康にみえる。彼らを観察して得た一般的な印象は、しあわせな満足した赤ん坊の集団というものである。しかし、ときには障害の兆候と普通みなされる行動の型を表わすこともある。例えば「指しゃぶり」だが、これは赤ん坊がベッドに入っているときも床で遊んでいるときも表われている。身体をゆすすることは、特にベッドに寝ているときに度々表われる。赤ん坊は眠っている間も、目覚めているときと同じように身体をゆすっている。ある子供たちは、ベッド



や壁に頭をぶつける。これについて保母は、赤ん坊が欲求不満のときにこのことが起きるといつている。この種の兆候の全てが記録されたわけではないが、記録には度々表われ、子供たちは、指しやぶり、ゆすりその他をよくするとして描写されている。観察の時点で六カ月をちよつと過ぎた頃の一人の赤ん坊のうち、一〇人は指しやぶりがあつた。指しやぶりをする一〇人の子供のうち、四人はゆすりの行動を示し、三人は寝台や壁に頭をぶつつけるのが観察されている。つまり、一人のうち三人は障害の兆候である三つともを示し、一人は二つ（指しやぶりとゆすり）そして六人は指しやぶりの行動のみを示したことになる。一人の子供はこの種の兆候を何も示さなかつた。

## 幼児の家への移行

乳幼児が体験する欲求不満というものが、関心、理解あるいは暖かさの欠除というより、集団的枠組の中では宿命的な日常化に本来起因するとなれば、子供の生活における最初の重要なトラウマ（衝撃）は、一年目の頃彼らが乳児の家を離れて幼児の家へ移行するまでは起こらないと言えるだろう。規則とし

て、子供たちはこの移行を個人的には行なわない。むしろ、一年目に達した子供たちが四、五人集団になって移行する。そしてその後乳児の家の他の子供たちが充分に成長すると、その度に前の集団に加つて八人の新しい集団がつくられる。彼らが移行するときは、新しい保母に出会う。彼らは全く新しい環境（新しい家）へ移行する。その上ある子供にとつては、仲間集団にも変化があり、数人の子供と共に集団に入れられるわけだが、この子供たちについて、彼は知りもしなければ、思い出さないこともあるのだ。

教育の権威者たちは、この種の突然の変化の形が子供に惹き起こす情緒的な障害を知らないわけではない。それで障害を起こすものうちある面については、和らげようと保母の世話を持続させることの試みがなされている。つまり、子供たちが乳児の家を離れる数週間前に新しい保母を乳児の家に配置すること——こうして子供たちになれた定常な場面で保母に愛着を抱くような機会を用意する——によつて、この意図が達成出来るのではないかとキブツ側は希望をもっている。しかしながら、この姑息な手段も用いられず、また子供たちは新しい住いに移行する前に、新しい

保母と何ら接触をもたないでしまう場合もある。私たちの研究の期間中も、この新しい集団に配属された保母が、ある朝乳児の家へやつてきて、彼らが何の用意もしない間に五人の年長児をつれて突然幼児の家へ移つていった例があつた。

親しい仲間、家そして日課から突然引き離されることは、子供たちにとつて極度に不安なことだといふことは推測出来る（同じ部屋の中で寝台をかえただけでも彼らをいらだたせるのに充分だつたといふ事実が思い出される）。しかし、運わるく私たちはこの移行時の五人の子供たちを観察できなかった。が数カ月後、一人の子供が乳児の家から新しい集団に移されたが、そのとき彼の様子が観察された。

【ロン（二三カ月）は前庭の寝台において、他の子供たちは裏庭にいる。彼は前もつての準備は何もなく、保母と接触することもなく移されてきた。彼は丁度目ざめたところだが、疲れて気むづかしくみえた。しかも彼の顔には泣きあとがみえる。私（スパイロ夫人）はこれは彼にとつてつらい時ではないかという感じがした。彼は私を認め、私は彼を抱きあ

げた。保母が出てきた。それで彼はしあわせそうではないと私は言った。彼女は勿論そうだと返事をした——全てのことが彼にはまだ新しいものであり、まだ適応していない。私は彼を連れて裏庭にいき、他の仲間と共に囲いの中に入れた。彼はすぐに「気楽に」なつたように見え、そこにあつた玩具をいじり、這いまわり、立ち上がり、私をみてほほ笑んだ。そして他の子供たちを思いがけず受け入れたように見え、ちよつと他の子供たちも彼を受け入れたようだった。」

この観察から五日後、ロンと集団の他の子供たちとの間にはじめての交流が記録された。三日後に初めて笑つたことが観察された。このはじめの期間、彼はほとんど食べず、度々眠っていた。そして観察者がいるときは、彼女のそばを離れようとはしなかつた。ロンにとつて彼女は乳児の家のときから知つていたので、唯一つの連続する絆であつたのである。これに続く数カ月後、あと二人の子供がグループを八人にするために加えられた。しかし彼らの場合は、数週間にわたり乳児の家で働いていた保母で、その後彼らの新しいグループで保母の助手となる人と共に移つてきた。

この二人は乳児の家にいるとき前もつて観察されていたので、幼児の家での行動が以前のものと比較された。幼児の家では二人とも「活動的で、敏捷で、外向的」である（同程度ではないが）と評価されていた。移行の直後、二人とも静かで、受身的で引込んでいた（同じ程度に）ように見えた。彼らの初めの反応は、以前のものと鋭い対比を示している。移行後一週間目に記録されたものの抜粋は次のように書かれている。

【ナオミ（一五カ月）とハイム（一五カ月）は共にサークルの中にいる。彼らは共にいて、無感動のようだ。乳児の家で二人ともよくやつたように、あちこちはいまわることも、おしゃべりも、うれしそうなお声も出さない。彼らは全く静かで、ただ眺めている。笑いもせず、私が彼らの名前を呼んでも答えようとしない。彼らの顔には悲しさと真面目さが交錯する。「全てが彼らによくはないのです。」とシュラが私に言った。ここでの最初の日、ハイムは一日中泣いていたし、ナオミは誰をみることも拒んだ。彼らはよく知つているヤツファにさえも反応しなかつた。」

その後に至つて彼らが同じような行動を示しているのを観察して、観察者は次のように記している。

「新しい家、新しい条件、新しい友だちへと完全に移行することは、子供たちにとつて苦痛に満ちた驚くべき経験なのだと感じないわけにはいかない。」

残念なことに、この研究は二人の子供の移行後間もなく終つたので、彼らの行動を追跡して、新しい状況に適応するのにどれ程の時間がかかるかをみることは出来なかつた。しかし記録された観察からは、この移行に際して彼らが表わした受身的態度と引込み思案の態度は少なくとも二週間は続いた。そして二週間目の終わりには、他の子供たちや囲りに対してある興味を示し初めた。

（つづく）